「誰にでも開かれた芸術」

はじめに

美術館に行って作品を見るときや音楽鑑賞をするときなど、多くの場合そこには作品、題名、作者という３つの情報が提示されている。主にこの３つの情報をもとに私たちは芸術を鑑賞していると思う。そこに障害のあるなしは関係なく一つの作品として見られる。私が興味を持った障害のあるアーティストたちが生み出す芸術は現代社会に様々なことを訴えかけることができると思う。

障害者と芸術

障害者かそうでないかで差別をしてはいけないことや、多様性を認め合うことなど当たり前のことではあるが無意識のうちに差別をしていたり、優勢思想がはたらいていることもある。しかし、アートに触れるとき障害の有無は関係なく、作品に対して感動すれば自然とリスペクトが生まれ、アーティストとしてすごいという価値基準が生まれると思う。私が障害を持つアーティストの作品に興味を持ったように、今全国で、障害のあるアーティストたちの作品を集めた展覧会が開催され、注目を集めている。そこには一風変わった作品が多くあるというが、一人ひとりのアーティストの障害や困難さが、作品に力を与えていることが見て取れる。ぜひ一度作品を見てほしい。

また、視点をかえて障害者とアートを見ると、良い側面が見えてくる。ヘラルボニーという会社は知的障害のある作家のアートを取り入れた商品などの企画や販売を手掛けている。この会社とライセンス契約を結んでいる知的障害のある作家は約１５０人ほどいるという。障害者の方が就労継続支援などで得られるお金(工賃)は極めて少ない。しかし、一方で契約作家の中には一般の作家と同等に稼ぐ人もいるという。障害とビジネスという成り立ちにくいイメージのある組み合わせだが、障害者と私たちをつなげる良い懸け橋になっているとも思う。

おわりに

障害者のアートを通して考えさせられることはたくさんある。興味を持ったら一度触れてみてほしいと思う。ただなんのバイアスもなく感動させられる作品に出会えると思う。

(参考文献)

・日本財団ジャーナル　「心奪われた独創性。障害のあるアーティストたちが生み出す芸術の楽しみ方」
https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2022/70865
・朝日新聞　ヘラルボニー創業者兄弟に聞く
https://www.asahi.com/sdgs/article/14802379